〔実践報告〕

わが国初の乳がん看護認定看護師教育課程の 教育プログラム開発と役割の普及

阿部 恭子¹⁾ 井関 千裕¹⁾ 吉本 照子²⁾

Development of an Educational Program and Spreading the Role of the Certified
Nurse in Breast Cancer Nursing for the First Time in Japan

Kyoko Abe¹⁾, Chihiro Iseki¹⁾, Teruko Yoshimoto²⁾

要 旨

本稿では、2005年に千葉大学看護学部（当時）に設置された、わが国初の乳がん看護認定看護師教育課程の教育プログラム開発と乳がん看護認定看護師（以下、乳がん看護CN）の役割の普及について報告する。教育プログラムは、日本看護協会が定める基準カリキュラムにそって、講義・演習・実習を行った。専任教員が専従する体制をとり、臨地実習での臨床指導者との連携や、研修生への個別指導を行った。常に、運営上の課題を見直しながらプログラムの検討・修正を実施した。プレスリリースや記者会見、市民公開講座の開催と報告書の配布を通じて、乳がん看護CNの役割の普及を図った。乳がん看護CNの活動に関する調査では、修了生が、役割を發揮している実態が示された。看護管理者は、活動の成果としてナースの質の向上、チーム医療に対する貢献などを挙げていた。修了生は、本学において習得した知識と技術をもとに、ナースへの教育活動により質の向上を図り、CNの役割を發揮しているといえる。今後の課題は、様々な教育機関での学びを得た乳がん看護CNのネットワーク化である。

Key Words：乳がん看護認定看護師，教育プログラム開発，認定看護師の役割の普及

1) 前千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター認定看護師教育課程

2) 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

1) The former Training Course for Certified Nurse in Breast Cancer Nursing,
The Center for Education and Research in Nursing Practice,
Graduate School of Nursing, Chiba University

2) The Center for Education and Research in Nursing Practice, Graduate School of Nursing, Chiba
University

Abstract

In this paper, we report on the development of an educational program and the expansion of the role of the Certified Nurse in Breast Cancer Nursing (CN in BCN) for the first time in Japan. The educational program was established at the Chiba University School of Nursing in 2005 and consisted of lectures, exercises and practical training along with standard curriculum determined by the Japan Nursing Association. Full-time faculty members took full responsibility for this program. We collaborated with clinical instructors in clinical practice and provided detailed individual instruction to trainees. We reviewed and revised the program based on the results of course evaluation of the educational program and management issues. With the expansion of the role of CN in BCN, we disseminated information about the role of CN in BCN through press releases, press conferences, civic public lectures and reports. A survey on the activities of CN in BCN indicated that graduates are fulfilling their roles; nursing administrators mentioned that the quality of nurses has been improved and CN in BCN are contributing to team-based medical care. Based on the knowledge and skills they acquire through educational activities for nurses at our university, graduates are demonstrating the role of CN by providing quality care. A future task is to create a network for CN in BCN who attend various educational institutions.

Key Words: Certified Nurse in Breast Cancer Nursing, Development of educational program, Expansion of the role of the Certified Nurse

I. 緒 言

認定看護師（以下、CN）とは、日本看護協会の認定看護師審査に合格し、ある特定の看護分野において熟練した看護技術と知識を有することが認められた者をいう¹⁾。教育機関の認定は、認定看護分野の教育課程ごとに、日本看護協会認定看護師制度委員会（以下、制度委員会）が審議し決定する。

わが国において、乳がんは、1999年以降女性のがん罹患数の第1位である²⁾。乳がんの好発年齢は、45～50歳で、妻・母・社会人として重要な役割をもつ世代であり、乳がんの罹患は、患者自身のみならず家族や社会にも大きな影響がある。また、手術術式の縮小化に伴って入院期間は3～7日程度となり、外来を中心に集学的治療が行われるため、治療選択の支援、ボディイメージの変容へのケア、術後リンパ浮腫予防のセルフケア支援、薬物療法の有害事象に対するセルフマネジメントなどの支援が重要である。乳がん罹患数の増加とともに、乳がん患者・家族への専門性の高い看護実践が望まれるようになり、日本がん看護学会が申請母体となって2003年に乳がん看護が分野特定された。そして、2005年に千葉大学看護学部（当時）が、乳がん看護CNを育成する教育プログラムの開発と役割の普及を目的に、当時、本邦初にして唯一の乳がん看護認定看護師教育課程を設置した。

2013年に静岡県立静岡がんセンターが、2014年に鳥取大学医学部附属病院が、乳がん看護分野

の教育課程を設置した。千葉大学（以下、本学）で開発した教育プログラムは、これらの教育機関に提供され、修了生が運営に協力したことから、本学における教育課程の継続の有無について検討し、2015年度の看護学研究科教授会での審議を経て、教育プログラムの開発と認定看護師の役割の普及という当初の目的を果たしたと判断し、2016年度をもって閉講することを決定した。

本稿では、2005年度から2016年度まで、12年間にわたる教育プログラム開発と乳がん看護CNの役割の普及について報告する。

II. 教育プログラムの開発

1. 教育内容

制度委員会は、認定看護分野ごとに認定看護師教育基準カリキュラム（以下、基準カリキュラム）を制定し、教育課程ではそれに沿ってプログラムを実施する。また、基準カリキュラムは5年ごとに改定されるため、本学では、平成21年度と平成26年度に教育内容の変更を行った。表1に本学の平成26年度以降の教育内容を示す。教科目は、認定看護師に共通して求められる役割と能力を学ぶ「共通科目」、乳がんの診断・治療の知識と対象を理解し支援するための理論を学ぶ「専門基礎科目」、乳がんの集学的治療を受ける患者への看護と乳がんの特化した看護技術を学ぶ「専門科目」、
「学内演習」、「実習」からなる。シラバスや時間割の作成と講師の選定は、各教育課程に委ねられる。

1) 科目・講師・講義内容

本学では、「共通科目」は、学内の教員に依頼し、「専門基礎科目」は、乳腺専門医や学内の教員および看護系大学教員に講師を依頼した。「専門科目」は、専任教員が担当し、さらに、乳がん患者への臨床実践経験が豊富ながん看護専門看護師、乳がん看護CN、がん関連分野のCNに講師を依頼した。

乳がん看護においては、女性のライフサイクルや、ストレス・コーピング理論、危機理論、セルフケア理論、家族看護理論などの概念を理解して、個別の看護実践への適応を判断する能力が必須となる。しかし、臨床では、クリニカルパスが多用されており、看護実践を振り返る概念化の機会が減っている。研修生にとって、概念と臨床での現象を結びつけるのは容易ではないため、講義を担当する講師には、事例を用いて概念と臨床での現象の関係を具体的に説明するよう専任教員から依頼した。また、チーム医療やリーダーシップの科目では、臨床で想定されるチームの課題解決やコ

ンフリクトを想定してグループワークやロールプレイを行った。一方、座学だけではなく、乳がん術後の補整下着・パッドのメーカーのフィッティングルームの見学や、医療用かつらメーカーによる頭皮ケア方法の講義やかつらの試着などを含めた。

2) 臨地実習

臨地実習は、平成23年度までは5週間の実習であったが、実習の振返りや記録等の整理の時間を確保するために平成24年度以降は6週間に変更した。原則として1施設に研修生2名を配置した。実習前の準備は、研修生にポートフォリオの作成を促し、臨床実践経験や臨床での乳がん看護の実践内容を振り返り、実習での学習課題を明確にするように指導した。実習内容は、基準カリキュラムの内容にそって乳がん看護CNの指導のもと、病棟や外来で初発乳がん患者や再発乳がん患者の受け持ちをするかたちで実施した。また、乳がん看護CNに対しては、医師や患者会から、乳がん検診啓発のイベントや乳がん患者・家族の療養生活にかかわる患者セミナーでの講師の役割を求められることが多い。そのため、「実践・指導・相談」というCNの3つの役割¹⁾の一つである「指導」については、実習施設内での看護職者を対象とする学習会を行った。実習開始のおよそ1か月前に、研修生と実習担当教員で実習施設に出向き、実習指導者や看護管理者らと学習会のテーマについて事前打ち合わせを実施した。その後、教員の個別指導のもとプレゼンテーション資料の作成や予演を行った。実習では、臨地実習指導者の指導を受け看護職者を対象に30分程度の学習会を行った。

実習終了後の学内の事例報告会では、受け持ち患者への実践について、理論の適用や研究成果の活用、チーム医療におけるCNの役割の視点で考察を深めた。事例報告会には、実習指導者にも参加してもらい、多職種との関わりなどチーム医療の視点も含めた講評を得た。平成22年度からは、実習指導者運営連絡会を開催し、実習指導者同士の情報交換や教員と実習指導者での実習の進め方の検討を行い、実習施設の指導体制や指導内容が等しくなるようにした。

2. 定員数、開講期間

平成17年度から平成20年度は、10月～翌3月開講であったが、講義室などの学習環境をよりよく整備するために平成21年度からは7月～12月開講に変更した。定員は、初年度は20名、次年度から3年間は30名に増員し、教育の質の担保と安定的

表1 教育内容

	授業科目	授業時間数
共通科目	看護管理	15
	リーダーシップ	15
	文献検索・文献講読	15
	情報管理	15
	看護倫理	15
	指導	15
	相談	15
	対人関係	15
専門基礎科目	腫瘍学概論	30
	がん看護学総論 1	30
	がん看護学総論 2	30
	乳がん看護概論	15
	がんの医療サービスと社会的資源	15
専門科目	集学的治療を受ける乳がん患者の看護	45
	乳がんサバイバーとその家族への心理・社会的支援	15
	乳がん患者の意思決定を支える看護技術	15
	乳がん患者のボディイメージ変容への援助技術	15
	乳がん患者のリンパ浮腫の看護技術	30
学内演習		45
臨地実習		225
合計		630

運営のために平成21年度以降は25名とした。

3. 個別学習支援

研修開始前に、乳がんの治療や看護の教材を提示して自己学習を促し、さらに、実践事例のまとめや他部署での乳がん患者のケアニーズの把握などの自己学習課題を掲示した。

「学内演習」の科目では、事例検討、看護過程展開演習、事例報告を行った。専任教員は、研修生に看護実践における根拠の意識化と実践の振り返りと評価を通じて、自己の学習課題の明確化を図った。また、理論を活用して、目的的に演習に取り組めるよう支援した。

実習では、専任教員と実習指導者が連携をとって、実習要項に沿って実習を進めた。また、専任教員は、実習記録の指導を行い研修生の進捗に応じて実習方法を助言した。

個別面談は、入学時、臨地実習前、修了前に行った。研修期間中は、学習環境の調整や学習課題の達成状況の確認、学習支援ニーズの把握と学習方法について助言した。修了前は、認定審査の取組方法の確認と助言をしたり、将来の認定看護師としての実践を視野に入れて自施設の看護管理者や認定・専門看護師との連携・協働について相談に応じた。

4. 教育プログラムの運営

開講当初から、専任教員や事務担当者の専従の体制を整えた。また、運営経費は、選抜料、研修料から支出し、外部資金も得て、学習環境の調整や広報活動を行った。外部資金は、平成17年度～20年度は、プリストル・マイヤーズスクイブ財団から34万ドルの助成を得た。さらに、平成26年度～28年度は、乳がん検診啓発と乳がん患者・家族への支援を行っている認定NPO法人J.POSHから総額150万円の奨学寄付金を得た。

5. 教育プログラムの評価

教育プログラムは、常に、運営上の課題を見直しながらプログラムの検討・修正を実施した。アドバイザリーボードによる評価、日本看護協会による認定確認・認定更新審査、外部評価委員会による評価³⁾では、いずれにおいて適切に実施していると認められた。独立行政法人大学評価・学位授与機構による評価⁴⁾では、社会・経済・文化の発展に資すると評価された。さらに、教育プログラムの継続については5年ごとに、センター運営委員会ワーキンググループによる評価をもとにセンター運営委員会で審議した。研修生からの評価では、課題レポートの提出時期の偏りや、講義内容が重複する科目の指摘があった

ため、プログラムを見直し講師に課題の提出時期の変更を依頼したり、講義内容の調整を行った。

6. 教育プログラムの活用・発展

平成21年度および平成26年度に、基準カリキュラムの改定が行われた。ワーキンググループには、本学の専任教員や非常勤講師および修了生が参画した。

また、乳がん看護認定看護師教育課程は、2013年に静岡県立静岡がんセンター（定員20名）、2014年に鳥取大学医学部附属病院（定員10名）において開講された。静岡県立静岡がんセンターの開講時の専任教員は、本学での教育経験を有するがん看護専門看護師（以下、CNS）と、本学を修了した乳がん看護CNであり、本学で開発した教育プログラムを参考にプログラムが展開された。また、これらの教育課程でのプログラム実施には、本学の専任教員が非常勤講師として、修了生が非常勤講師や実習指導者として協力した。

III. 乳がん看護認定看護師の役割の普及

1. 乳がん看護認定看護師の役割の普及を目指した取り組み

1) プレスリリース・記者会見の実施

2005年3月に東京都内の会場にて平成17年度修了式と記者会見を行った。記者会見では、専任教員は、教育プログラムの内容や乳がん看護CNの役割を紹介し、患者団体代表者からは今後の乳がん看護の発展への期待をアピールした。記者からは、治療選択における乳がん看護CNの役割を大いに期待する意見や、乳がん看護CNの増加とアクセスの利便性を要望する意見があった。なお、記者会見に向けては、150社にプレスリリースを行った。記者会見に出席したのは20社で、1社が全国版のテレビのニュースとして放映し、18新聞（地方紙）、3専門誌などに記事が掲載された。

2) 研修生の海外研修の実施

英国におけるブレストケアナースの役割の理解を目的に、平成17年度・18年度の研修生に対して、4泊6日の日程で海外研修を行った。ブレストケアナースによる講義では、その役割は、精神的サポートと情報提供であり、さらに集学的医療チームの個々のメンバーの役割を調整していることが示された。研修生は、今後の日本の乳がん医療におけるチーム医療の推進の必要性と、ナースに求められる役割調整の重要性を再認識していた⁵⁾。

3) 市民公開講座の開催

2008年に、“乳がん医療が変わる「患者とともに歩む乳がん看護認定看護師」”と題して東京と

大阪で市民公開講座を開催した⁶⁾。東京での開催内容は、テレビのニュースで紹介された。その他に、新聞社・雑誌社の取材があり、媒体に開催の内容が詳細に掲載された。また、記録集は、患者・家族向けと医療者向けに2種類作成し、医療機関、患者団体、乳がん看護CNに郵送・配布した。

4) フォローアップ研修の実施

2006年～2009年まで、修了生のCNとしての役割の発揮を促すためにフォローアップ研修を実施した。他分野のCNや乳がん看護CNが実践報告を行い、さらに、地域ごとのグループワークでは、院内広報誌による役割の周知や、看護管理者への活動計画書のプレゼンテーションなど、活動拡大を目指す情報交換を行った。

2. 乳がん看護認定看護師の役割の普及の成果

修了生の活動状況は、修了生が所属する施設の看護管理者を対象とする調査⁷⁾では、ナースの質の向上、チーム医療に対する貢献などが示され、修了生への調査⁸⁾では、回答者の80～90%が「実践・指導・相談」というCNの役割を發揮していた。

本学の修了生のうち299名が乳がん看護認定看護師資格を取得した(平成29年7月21日時点)¹⁾。修了生は、日本がん看護学会、日本乳がん看護研究会、日本乳癌学会などに参画し、乳がん看護の普及・発展と乳がん看護CNの実践力の向上を図る活動を行っている。特に、日本乳がん看護研究会では、2010年度以降のフォローアップセミナーを実施し、修了生が主体的に最新の知識の習得と実践力の向上に取り組んでいる。さらに、社会貢献として、日本各地で、修了生らによるBreast Care Nursing研究会が設立され、地域における乳がん看護の質の向上を目指す教育活動が行われている(13団体、2017年時点)⁹⁾。

IV. 考 察

乳がん看護CNのモデルは、イギリスで1976年に誕生したプレストケアナースである¹⁰⁾。プレストケアナースの教育では、乳がん患者の精神的サポートと情報提供、さらに、多職種と連携・協働できるメンバーシップや、チーム医療を推進するリーダーシップの能力も兼ね備えた人材育成が求められた。本学では、科目の講師を教育経験や臨床実践経験が豊富な看護系大学教員、CNS、CNに講師を依頼した。チーム医療やリーダーシップの科目では、グループワークやロールプレイなどに取り組んだ。このような質の高い講義や臨床への応用可能な演習によって、乳がん看護CNに適

う人材育成がなされたと考える。

また、研修生が所属する施設の背景や、研修生の臨床経験年数、乳がん治療・看護の知識・技術は一人ひとり異なっていた。研修生の特徴や状況をふまえてプログラムを実施し、研修生からの評価や運営上の課題を見直すことは、プログラムの洗練に不可欠であった。

乳がん看護CNの役割は、集学的治療を受ける患者のセルフケアおよび自己決定の支援、ボディイメージの変容による心理・社会的問題に対する支援などである¹⁾。プレスリリースやプレス発表、市民公開講座の開催と報告書の配布を通じて、乳がん看護CNの役割や活動の実際を広報した。また、修了生によるチーム医療における活動が報告された¹¹⁾。これらによって、乳がん患者・家族、看護職者、医師、メディカルスタッフの乳がん看護CNの役割に対する理解が促進されたと考える。

一方、看護管理者や修了生に対する調査において、乳がん看護CNとしての活動状況が示された⁷⁾⁸⁾。修了生は、本学において習得した知識と技術をもとに、CNの役割を發揮し、ナースへの教育活動によって看護の質の向上に貢献していた。

2013年以降は、複数の教育機関において乳がん看護認定看護師教育課程が始まった。今後の課題は、乳がん看護の推進と、乳がん看護CN自らの次世代育成のしくみづくりの観点から、それぞれの教育課程での学びを得た乳がん看護CNのネットワーク化である。

V. ま と め

本邦初にして唯一の乳がん看護認定看護師教育課程を設置し、教育プログラムの開発と役割の普及に取り組んだ。教育プログラムは、専任教員が専従する体制をとり、運営上の課題を見直しながらプログラムの検討・修正を行った。プレスリリースや記者会見、市民公開講座の開催と報告書の配布を通じて、乳がん看護CNの役割の普及を図った。修了生への調査では、本学において習得した知識と技術をもとに、ナースの質の向上を図りCNの役割を發揮していた。本学で開発した教育プログラムは、他の教育機関に提供された。今後の課題は、様々な教育機関での学びを得た乳がん看護CNのネットワーク化である。

謝辞 本教育プログラムの実施・運営にご協力賜りました皆様に厚く御礼申し上げます。

利益相反 申告すべき利益相反はない

文 献

- 1) 日本看護協会：認定看護師とは．<http://nintei.nurse.or.jp/nursing/qualification/cn> (2017年12月8日アクセス)
- 2) 国立がん研究センターがん情報サービス「がん登録・統計」：地域がん登録全国推計によるがん罹患データ(1975年～2013年)．http://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/stat/summary.html (2017年12月8日アクセス)
- 3) 赤沼智子, 大野稔子, 北池正：千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター認定看護師教育課程(乳がん看護)外部評価報告書, - , 2013 .
- 4) 大学評価・学位授与機構による選択的評価事項に係る評価(平成19年度実施)．<http://www.n.chiba-u.jp/outline/goals-plans-evaluation/evaluation.html> (2017年12月8日アクセス)
- 5) 田中香, 阿部恭子：乳がん看護の理想のかたち - 英国にプレストケアナースを訪ねて - . 看護学雑誌, 71(4), 350-353, 2007 .
- 6) 千葉大学看護学部市民公開講座：http://www.chiba-u.ac.jp/others/topics/past_event/event_2008.html (2017年12月8日アクセス)
- 7) 大野稔子, 赤沼智子, 北池正：修了生動向調査．千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター認定看護師教育課程外部調査報告書, 141-167, 2014 .
- 8) 大野稔子, 北池正, 鈴木友子：乳がん看護認定看護師教育課程修了者の実態調査．第33回日本看護科学学会学術集会講演集, 221, 2013 .
- 9) 阿部恭子：Resource5 関連学会・研究会．阿部恭子, 矢形寛(編), 乳がん患者ケアパーフェクトブック, 学研, 351-354, 2017 .
- 10) 田中完児：英国におけるプレストケア．射場典子, 長瀬慈村(監), 乳がん患者へのトータルアプローチ, ピラールプレス, 15-18, 2005 .
- 11) 金井久子：長期化する乳がん患者の療養生活をチームで支える乳がん看護認定看護師．看護, 65(5), 102-105, 2013 .